

## 「京都プロジェクト」紹介

森 洋久

京都プロジェクトとは、文部科学省の地域連携科学研究費「分散技術を応用した平安・京都ビジュアルな歴史地理情報基盤の構築」を基に、平成11年度から、平成14年度までの3年間の計画で、京都に関する地理、歴史情報をGIS上に集積し、データベース化するプロジェクトである。通称「京都プロジェクト」と呼んでいる。ここでは、瀧浪氏に対するコメントに代えて、本プロジェクトを紹介したい。

当プロジェクトは、地理的な空間の広がり、歴史という時間的広がりを同時に持ったデータベースを構築し、京都という町が時代を追ってどのように変化したか、またその変化の中で、どのように歴史的な事象があったのかをビジュアルに表現することを目的としている。

プロジェクトは三つのグループから構成されている。古地図を収集し京都の町の変化を追えるベースマップを作る空間グループ、この空間上に、様々な歴史情報を集積していく時間グループ、さらにこれらのベースとなるシステムを作るシステムグループの三つのグループからなる。

空間グループでは、京都に関する近世近代の古地図の目録を作成するところから始めたが、その作業の中で、森幸安という地図収集家の存在を知り、プロジェクトの途中から、この人物の追跡が主な目的となった。森幸安は1850年前後に活躍し京都に住んでいた人物であり、日本のみならず世界の地図や天文図を収集することがライフワークであった。その貪欲なまでの地図収集意欲は、彼自身の世界観から生まれてきているようである。天文としてとらえられる宇宙の中に地球があり、その中にアジア、日本があり、そして京都、というように連続的な一つの空間の表現として地図をとらえていた。

時間グループでは、特に目を引く研究は、高津古文化館所蔵の洛中洛外図屏風絵の解析である。空間グループの集積したデータを基に、この屏風絵の内容年代を特定することから始まり、さらには描かれている人物の装束、持ち物をデータベース化し、この屏風絵を多角的に解析しようとしている。

システムグループは、様々な組織が共同で情報を入力できること、また、古地図が集積できることを目的として開発を始めた。そのため、さまざまな組織で情報が共有できる分散型アーキテクチャを基本として、また、現在のGISにあるような基準座標系を持たず、古地図にあった自由な座標系が設定できる新機能が盛り込まれている。さらに入力された古地図から現代図あらゆる地図を重ねたりつなぎ合わせたりすることのできる機能を開発した。

京都プロジェクトは昨年度をもって科研費のプロジェクトとしては終了したが、実際には上記3グループは現在でも活動している。そのほかにも、たとえば当研究所の宇野教授の「GISシステムを用いた考古空間情報の高度解析法の開発研究」など、他の研究グループやプロジェクトとも連携しており、京都プロジェクトはなお続いていると言えるであろう。

(国際日本文化研究センター)